書評

救荒雑草—飢えを救った雑草たち—

佐合隆一／著

「救荒作物」という言葉は知っていたが「救荒雑草」という言葉は初めて聞いた。「救荒作物」は凶作の時に、気象不順にも強いヒエ、ソバ、サツマイモなどで、これまで幾度となく襲って来た飢餓においても人命を救っていたと言われている。本書は、飢饉で「救荒作物」すら口にすることができない時に、少しでも人々の飢えをしのぐのに役立ってきた雑草について、まとめたものである。これまでの日本の歴史の中で、「救荒雑草」がどのように食べられてきたか見直そうとしている。

以下、本書の内容を引用しながら紹介する。

「救荒植物」について知る意義については、引用されているように、林氏(1944)は「第一に凶作年において飢餓を免れることができる。山林原野を含め路傍など地上のいたるところに種々雑多な植物が繁茂している。その中に食用にできるものも少なくないが、食べられないものもある。平素から鑑別できる能力を養い、試食体験しておくならば・・・・」と述べている。このころは戦時中であり、「凶作年や戦時下の野戦の兵糧獲得の必要に迫られた場合必要であるが、今はこれには当てはまらない。最近の自然災害としては、1995年の阪神・淡路大震災、2011年の東北地方太平洋沖地震が特に大きい。このような自然災害時に食料が身近にあることの重要性が認識される調査報告が紹介されている。避難場所での生活が長引き、被災者たちの栄養バランスが崩れ、とくに野菜などからとるビタミン類が不足していた。このことについて、梅本(1996)は「阪神大震災で救荒植物に役立ったか」の中で「救荒植物」はほとんど利用されていなかったとしている。その理由として、「救荒雑草」に関する知識と経験の世帯間の断絶、利用知識の欠如、生産現場と消費現場との著しい乖離等をあげている。子供のころから、常日頃から植物で食用の可否を知り、日常的に食用する機会を増やす教育の必要性を感じる。と著者は訴えている。

今、スーパーへ行けば何不自由なく様々な食料を得ることができるのがあたりまえの時代だが、山菜取りなど春や秋の野生植物の採取し，またそれを食べて楽しみながら、食べられる雑草を自然に学んでゆくのもよいのではないだろうか。

全体を眺めてみると、食べられる雑草としてよく知られたものとしては、ワラビ、ゼンマイ、コゴミ(クサソテツ)、ツクシ(スギナ)、ジュンサイ、クワイ、カタクリ、ユリの根などがある。セリなどは手でつまんでやわらかい部分をてんぷらにするとあくも気にならずおいしい。ヨモギはもちろん草餅に。しかし、今まで気づかなかった，食べられると聞いて雑草を新たに食べてみようと思った時、具体的にどの部分を採取して、どのように下ごしらえをして，どのように調理すればよいかわからないものが多いのに気が付いた。さっそく、本書のお世話になった。

特に私が印象に残った雑草は「キクイモ」である。子供のころ、遊び場だった近くの土手に黄色いキク科の花がたくさん咲いていた。子供の頃、買ってもらった小さな植物図鑑で名前を調べた。「キクイモは地下にイモがあって食べられる。」と書いてあったので、掘ってみたものだ。最近、各地で道の駅や直売所がたくさんできている。近くの道の駅でキクイモが売られていたので、買って食べてみた。今までにないシャキシャキとした食感でおいしかった。私事だが、農学に進んだのは植物が好きだから、そして、植物が好きになったのは、この小さなポケット図鑑をしょっちゅう眺め、植物の名前を調べて楽しんでいたからだった。人はこのように身近なものに興味を持って、それについて知りたいと思い、調べ、知ることにより自然に知識が増え身につくものだと思う。

（小山　豊）